

●九州

高坂 葉月

年間130回以上の演奏会を行う九州交響楽団は、アクロス福岡やFFGホール等での自主公演に加え、九州各地への巡業やオペラやバレエの演奏、青少年向けのコンサート、ポピュラーコンサートなど、多様な場で活動をしている。通年にわたり音楽を届けるこの存在は、九州の文化的インフラといえるだろう。一方で、新型コロナ以降、客足が完全には戻らないという。聴衆の高齢化や人件費・移動費の高騰も重なり、常設オーケストラを取り巻く財政状況は依然として厳しい。

楽団の演奏の質は着実に向上している。小泉和裕前監督のもとで磨かれたアンサンブルに、技術力の高い若手奏者が加わり、音楽的な厚みが増した。第432回定期では、3年連続で客演したユベール・スダーンのもと、ブルックナー《交響曲第3番》では増強された金管群の厚い響きがまっすぐに客席に届き、《テ・デウム》では壮大でドラマティックな構築力が光る。プログラムは「戦後80年に寄せて」と題され、最後を《アヴェ・ヴェルム・コルプス》で閉じることで、高らかな祈りから内省へと聴衆を導き、深い余韻を残した。2024年に首席指揮者に就任した太田弦の得意とするイギリス作品も近年頻繁に取り上げられている。第433回定期では、ブリテン《ピーター・グライムズ》から「四つの海の間奏曲」と、楽団初演となる《テノール、ホルンと弦楽のためのセレナード》を披露。繊細かつドラマティックな演奏で、ホルンの福川伸陽がナチュラル・ホルンを思わせる柔らかな音色で空間に奥行きを与え、鈴木准の伸びやかな声がそれに呼応した。

定期演奏会前には音楽学者が聞きどころを解説し、団員が小品を演奏する「目からウロコの九響アカデミー」も毎回開かれており、ファンと奏者との親密なコミュニケーションの場となっている。さらに九響が近年特に力を入れているのがインクルーシブな演奏会である。2022年から続く「九響マタニティコンサート」は、クラシック音楽がこれから親になる人の不安を癒し、途中退席なども許容する設えが安心をもたらすのだろう。さらに今シーズンから始まった「夏休みリラックスコンサート」も同様に、年齢や障がいの有無にかかわらず安心して音楽を楽しめる場として重宝された。

また、ホワイトハンドコーラスNIPPONとの協働による「みえる かんじる あたらしい第九」も印象に残る。様々な

配慮が施された会場で、舞台上の合唱のみならず聴衆も白い手袋を着け、手話によって歌詞を表現しながら演奏に参加する。定期では見ない家族連れも多く、老若男女それぞれが手袋をはめて嬉しそうに表現していた。こうした試みも、オーケストラを地域に浸透させるきっかけになっている。新年度からは経営強化のため金融の専門家を迎え、平日昼公演など新たな試みも計画されている。新たな聴衆層の獲得に至り、活況につながることを期待したい。

通年活動を担う九響に対し、九州各地で続けられてきた音楽祭は、年に一度の凝縮された文化的機会として重要な役割を果たす。ゆふいん音楽祭は今年で50回、霧島国際音楽祭は46回、宮崎国際音楽祭は30回、別府アルゲリッチ音楽祭は25回を迎えた。これらの音楽祭は特別な催しというより、土地の一年のリズムの中に組み込まれた文化的な年中行事として機能している。戦後80年を迎えた今年の別府アルゲリッチ音楽祭では、「過去を学び 現在を生き 未来を描く」をテーマに掲げ、第一次大戦を経験したラヴェルの作品などがプログラムに組み込まれた。世界の出来事に対する強い意識を背景に、クラシック音楽と社会との接点を時代に即して問い直そうという姿勢が、この音楽祭では買われている。

宮崎国際音楽祭では、前身である宮崎国際室内楽音楽祭の時代から総合プロデューサーとして関わり、音楽祭を牽引してきた徳永二男に県民栄誉賞が贈られ、その受賞記念リサイタルも開催された。3日で席が埋まるほどの盛況ぶり、彼が地域からいかに信頼と期待を寄せられてきたかがうかがえる。紆余曲折を経ながらも回を重ねることで、奏者と地域の関係は深化し、聴衆もまた育っていくのである。

音楽祭に限らず、通年型のシリーズも各地で育っている。柳川市民文化会館「水都やながわ」白秋ホールでは、アーティスティック・ディレクターのイグナツ・リシェツキが明確なテーマ性を打ち出し、毎年8月にコンサートを企画。2023年から東欧、ウィーン、アメリカといった切り口でプログラムを構成し、地域に定着しつつある。

また、プロセスを共有する実践として、大分のiichiko総合文化センターの音の泉ホールで2023年から継続されている「おんがくのアーティスト・イン・レジデンス」が挙げられる。大分出身の奏者が集い、音楽を作り上げていくプロセスそのものを公開する。年に一度集い、音を重ねてい

く時間は奏者たちにとってもお互いの一年の様子を窺い知る、楽しみな機会になっているという。完成された演奏を聴く場から、音楽が育つ時間に立ち会う場へと、聴衆の関わり方も変化している。

そして、思想と日常を接続する表現として継続されているのが、河合拓始の「自然真栄楽」のシリーズである。5年目を迎え、年々人気を高めている。オーボエ・トロンボーン・ピアノ・鍵盤ハーモニカ・打楽器を基盤に、今年は歌やダンス、体術などが加わり、表現の幅がさらに広がった。九州の民謡が、土着的なリズムと洗練された和声感覚のハイブリッドによって、独特な世界を形作っていく。観客自らが効果音によって参加したり、盆踊りの輪に加わったり。予測不可能な展開が起こりながらも、その場に柔軟な共同体が立ち上がるような時間だった。

九州の音楽文化においては、参加や共有へとひらかれる方向と同時に、緊張と集中を極限まで高める表現も重要な位置を占める。その例として「エッセンシャル・ワークス」の演奏会を挙げたい。指揮者の浦部雪が率いる気鋭のアンサンブルが、シェーンベルク《月に憑かれたピエロ》やグリゼー《時の渦》といった20世紀の難曲を披露。これらは、生の音楽として体感する機会が少ない作品だ。なかでも《渦》での突破的な響きは会場を貫いた。四分音下げて調律されたピアノの攻めの演奏によって、時空の歪みを聴くような感覚に陥った。尖鋭的な表現に触れる機会が少ない九州において、この演奏は、聴衆に鮮烈な記憶を刻み込んだように思う。

広い九州の音楽シーンの中で、今回触れられなかったものも多い。しかし取り上げた実践に共通するのは、演奏会をどのような時間として立ち上げるのか、誰とどのように音楽が生じる場を共有するのかという問いが、明確に意識されている点だろう。日常に寄り添い、ともに過ごす場をひらく試みがある一方で、緊張と集中のなかでしか立ち現れない音の経験もまた求められている。その両極を保ちつつ、地域に寄り添う音楽を味わう機会が多く存在しているのが九州の音楽シーンの魅力だといえる。

高坂葉月（こうさか・はづき）

群馬県出身。東京藝術大学音楽学部楽理科卒業、同大学院修了。在学中、オーストリア政府奨学生としてグラーツ芸術大学およびインスブルック大学に留学。音楽学博士（東京藝術大学）。2015年～18年、九州大学大学院芸術工学研究院ソーシャルアートラボの学術研究員として、複数のアートプロジェクトの企画運営に関わる。西日本新聞や雑誌『音楽の友』にて批評活動も継続的に行っている。平成音楽大学非常勤講師。